

主体的な学びを支える総合的な学習の時間における言語能力の育成 — 探究的な学習を実現する言語活動の構想 —

進藤 弓枝

「総合的な学習の時間」（以下「総合」）が創設されて13年が経つ。平成20年3月に告示された学習指導要領が、今年度、小学校において完全実施となった。今回の改訂で、これまで総則に含まれていた「総合」が第5章として独立し、解説書が作られたことは、大変意義のあることである。「総合」の時間数が削減されたことを受け、各教科等の習得や活用と「総合」を中心とした探究とを相互に関連させ、一人一人の子どもの力を伸ばしていくことがより求められている。そこで、言語活動の充実という視点から、各教科等の言語活動を有機的に関連させることで、「総合」の学習を充実させるべく研究を進めた。

第1章 主体的、探究的な「総合的な学習の時間」の構想

第1節 「総合的な学習の時間」に求められているもの

今回の学習指導要領改訂においても、『『生きる力』を育む』という「総合」の理念は何ら変わっていない。「生きる力」とは、知・徳・体の三つが内面で総合化されたものであり、自分で思考、判断し、問題を解決していく実践的な力でなければならない。そのためには、子どもが自分の学びの有用性を実感したり、教師が適切な支援をしたり、基盤となる知識・技能に加え、言語能力を育てたりして、子ども主体の学習を展開することが求められる。

「総合」の改訂のキーワードは、「探究」「協同」「体験活動」の三つである。問題解決や探究的な活動を他者と協同して行う学習の積み重ねが大切である。そして、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった探究的な学習の過程において、言語活動を生かした体験活動を意図的に位置付けることで、「総合」における探究的な学習が充実すると考える。

第2節 「総合的な学習の時間」の現状と課題

平成20年1月に出された中央教育審議会答申において、「総合」の課題がいくつか指摘されている。その中の一つが、「学校教育全体で思考力・判断力・表現力等を育成するための各教科と総合的な学習の時間の適切な役割分担と連携が必ずしも十分に図れていない」ということである。

今回改訂された学習指導要領は、言語活動の充実を重点に挙げている。「総合」を充実させるためには、各教科等と「総合」との、知識や技能、学習過程の関連とともに、言語能力や言語活動の関連を明らかにすることが急務であると考えられる。

第3節 言語能力と言語活動

「言語活動」とは、文字どおり言語による活動のことである。知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのも、全て言語によって行われるといっても過言ではない。そして、その活動の基盤となるものが「言語能力」である。

第2章 言語活動についての各教科等と「総合的な学習の時間」との関連

第1節 学習指導要領において重視される言語活動

学習指導要領における各教科等の言語活動のとらえ方、「総合」における言語活動との関連性について調査した。その結果、各教科等で基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに言語活動を充実させることで、「総合」でも各教科等を横断、総合した探究的な学習が充実すると考える。

第2節 新しい教科書で取り上げられた言語活動例

国語科、社会科、算数科、理科の教科書に取り上げられている言語活動について調査した。傾向としては、学習指導要領の改訂を受け、言語活動を強く意識して作成されたことがわかる。また、多くの教科書で、単元で学んだことを教科の枠を超え、他の教科や生活の中で活用するという提案がされていることも意義深い。

どの教科書にも、はじめに学習過程が示され、適切に「課題を設定する」「計画を立てる」「まとめる」「話し合う」「振り返る」などの主体的な活動が位置付けられている。それは「総合」の探究的な学習の過程とも合致する。また、各教科書の中の学習過程に示されている言語活動は、「総合」でも取り上げられているものである。

第3章 主体的、探究的な学習を実現する言語活動の構想と実践

第1節 主体的、探究的な学習を実現する言語活動の構想

◇単元を見通して言語活動を位置付ける

単元を通してどのような力を身に付けさせるのかを明らかにし、そのためにどのような言語活動を行うと効果的かを考え、単元を貫く言語活動を設定する。そして、各学習過程の中で行う言語活動を単元構想の中に位置付けていく。そのとき、既習事項を確かめ、単元でどのように提示するかについて指導者が見通しをもつことが大切である。そのためにも、探究の学習過程と言語活動を位置付けた新たな単元構想図を提案した。

◇各教科等と関連させて言語活動を位置付ける

各教科等と関連させて行う言語活動には、次の四つの形がある。

- i 各教科等で行われる言語活動を「総合」で発展させて行う。
- ii 「総合」で行った言語活動を各教科に生かす。
- iii 各教科等で行う言語活動と「総合」で行う言語活動を並行させて行う。
- iv 各教科等で行う言語活動と「総合」で行う言語活動を統合させて行う。

また、話す・聞く活動や話し合い活動のように、全ての教科等の中で意図的に繰り返し行う言語活動もある。これらの活動は、子どもの発達段階に応じて系統立てて行うことで、司会力、対話力などの言語能力が育成され、各教科等の学習の基盤となる。

第2節 主体的、探究的な学習を実現する言語活動の実践

「総合」の学習が、主体的、探究的になることをめざして、以下のような実践を行った。

◇単元を見通して言語活動を位置付けた実践

- 第3学年「アンニョンハセヨ！韓国・朝鮮」

◇各教科等と関連させて言語活動を位置付けた実践

- 第3学年「発表名人10か条」i
- 第5学年「活動報告書」i
- 第5学年「インタビュー・アンケート」i
- 第5学年「企画書」ii
- 第3学年「ウェビングマップ」ii
- 第3学年「パンフレット交流会」iii
- 第5学年「司会力、対話力」

この結果、他者と協同し、主体的に学ぶ子どもの姿が見られるようになった。

第4章 主体的、探究的な学習を充実させるために

第1節 研究の成果と課題

◇各教科等と関連させて行う言語活動による確かな学び

○各教科等で個々に言語活動を行うのではなく、指導者が教科の枠を超え、相互の関連を意識して一貫した言語活動を行うことで、子どもたちにより確かな力を付けることができた。例えば、国語科で身に付けた知識・技能を「総合」で活用することで、子どもたちは戸惑うことなく一貫した言語活動を行うことができた。物理的にも短時間で行えるという成果もあった。また、国語科で学んだことを「総合」で活用することで、国語科での学びが実生活、実社会の中で役立つことを子ども自身が実感することができた。

●6年間を通して、系統的に言語能力を育成していかなければならない。また、教科等と「総合」の言語活動をうまく関連させ、子どもたちに「生きる力」と各教科等で身に付けるべき学力の両方をバランスよく育てていくことが求められる。

◇探究の学習過程に位置付けた言語活動による充実した学び

○適切な言語活動をそれぞれの学習過程に設定したことで、子どもたちの学びが深まり、充実していった。これは、言語能力が身に付いただけではなく、子どもの学習に対する意識が主体的、探究的に変容していったことから明らかである。学習が終わってからも、子どもたちの追究しようという意欲が続いたということは、まさに探究的な学びといえる。

●新たに提案した単元構想図は、見通しをもつ、探究の学習過程や言語活動を意識するという点で有効であった。一方、「一から作るとなると、大変。」という感想も聞かれた。学校で活用されるためには、各学習過程で行える言語活動を一覧にして、その一覧から選択できるような、作成のためのシステムを確立することが求められる。

第2節 主体的、探究的な学習の具現化

主体的な学びが成立するためには、子どもに学習の基盤となる各教科等で培う言語能力、各教科等の知識・技能が身に付いていること、そして、何よりも学習に対する意欲が備わっていなければならない。そのためには、指導者が、単元の見通しをもち、探究的な学習の過程を踏まえ単元を構想することや、子ども一人一人に適切な支援を行うことが大切である。